

ポスター3

ポスター発表(研究)

**外国につながる児童の行動面での適応における困難
—行動に影響しうる要因に着目して—**

本間愛州佳 (横浜国立大学大学院 修士課程院生)

1. 研究の目的

小学校でのボランティア活動中、忘れ物が多い、友人と衝突が起こるといった行動面で困難がある外国につながる児童を目にした。そこで、行動面の適応に困難があるA児(中国籍・男児・当時1年生)の課題を明らかにし、その背景要因を探ることを目的とする。

2. 研究の価値・意義

近年、公立学校に通う外国につながる児童生徒が増加し、日本の学校生活に適応が困難な子どもたちも在籍している。一方で、このような児童生徒に着目した研究は少なく、本研究は日本語教育と特別支援教育を視野に入れた研究の一蓄積になると考える。

3. 研究方法

積極的な参与者(Spradly, 1980)という立場で、対象を理解するための解釈的アプローチ(箕浦, 1999)によるフィールドワークと担当教員らへのインタビューを実施した。さらに、行動に影響しうる要因として黒葛原・都築(2011)を参考に、「日本語能力、母語能力、文化、家庭環境、発達」という背景要因のカテゴリーを抽出し、仮説生成を行った。

4. 結果と考察

A児はクラスメイトと並ぶ場面で衝突が起こると目に涙を浮かべ、「抜かしてない」「並んでる」と同じ言葉を繰り返す行動が多く見られた。日本語能力が未熟なA児は自分の立場を上手く伝えられず泣くことから、要因として「日本語能力」が挙げられた。また、並び方について日本の学校「文化」がまだ理解できていないという可能性も考えられる。さらに、学級担任へのインタビューからは、A児が並ぶ時は遊びに行く時間だと考えている可能性に加え泣く点より幼いと指摘され、A児の精神的な「発達」の未熟さが示唆された。問題となる行動は複数の背景が複雑に絡みあっていると考えられるが、A児の本行動の場合は上記の3つが大きな要因としてあげられた。

.....

【引用文献】

箕浦康子(1999)『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門—』, ミネルヴァ書房.
Spradley, J.P.(1980) *Participant Observation*. NY: Holt, Rinehart and Winston.
黒葛原由真・都築繁幸(2011) 外国人 ADHD 児の学習行動に関する分析『障害者教育・福祉学研究』 7, 59-73.